

(題名) 小・中・高校での防煙・禁煙授業の経験

のだ小児科医院 野田 隆

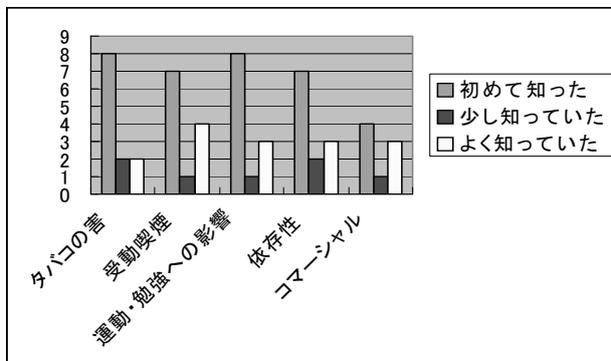
Anti-Tobacco CMの放送頻度など、欧米に比べてタバコに関する社会教育の遅れている日本では、家庭教育・学校教育の比重が高い。しかし家庭内の喫煙者が多い現状では、家庭教育に多くを期待できません。

学校での防煙教育は重要であり、子どもには家庭へ禁煙情報を持ち帰っていただき、禁煙サポーターになっていただく必要があります。

2004年から、学校医を勤めている小学校・中学校及び、鹿児島県の高校2校で防煙・禁煙授業を行い、データとしてまとまりの無いものではあるが、アンケートを解析することで見えてきたことを紹介します。

どの時期に何を話すか

小学校低学年（1-3年）

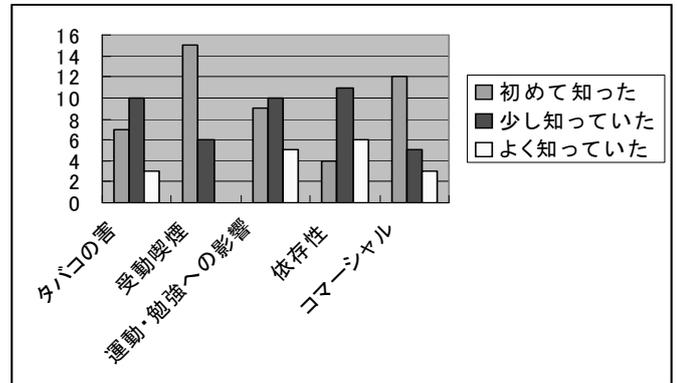


この時期は、新鮮な情報として聞いてくれますから、家庭に禁煙情報を持ち帰って禁煙サポーターになってもらいましょう。

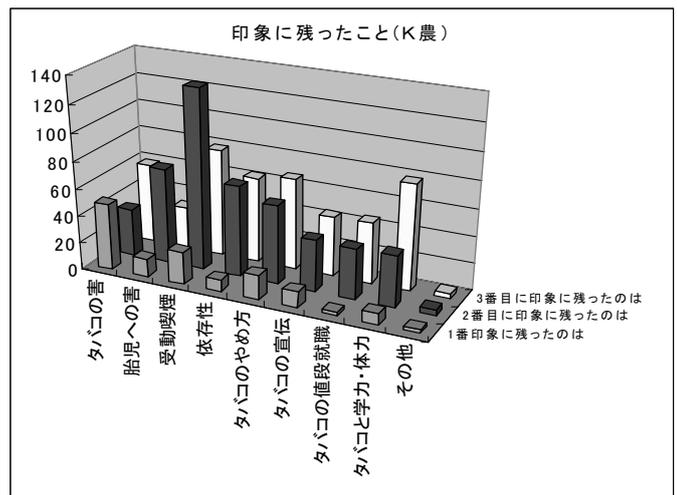
子どもの口から、驚きをもって伝えてもらうのは、親や、同居祖父母に効果的でしょう。

小学校高学年（4-6年）

この時期は、試し喫煙をしたがる年代で、受動喫煙の怖さについてさらに詳しく教えると同時に、若い喫煙者をリクルートするためのコマーシャルのからくりや、依存性について、教え込む必要があると思います。



高校生に対して



一番印象に残ったのはタバコの害、2番目に印象に残ったのは受動喫煙の害、3番目に印象に残ったのはタバコと学力というのが、多い答えでした。

まとめ

授業計画に組み入れてもらうこと

全校一度にしないこと（3-6年チャンスなし）

チームを組んで行いたい（何人かで）

受動喫煙について案外知られていない

喫煙開始の低年齢化を思わせるデータがある

小さい子には、喫煙する親を悪者にしない配慮が必要である